フラワーガーデン

園芸総合センター
末包　正

椿を鉢植えで楽しむ

あしひきの八峰の椿つらつらに
見とも飽かめや植ゑてける君
万葉集（巻二〇―四四八一）

このように、椿は古くから身近な植物として親しまれていたようです。

一、開花期

椿の育種目的の一つが、早咲き種を作ることにあり、このことから、現在では秋咲き種が増えつつあります。特に早いものでは八月下旬から咲くものがあります。遅咲きは五月の始めまで花が楽しめます。

二、鉢作りの特徴

椿の鉢作りは、肥後椿とか、一部の人達が盆栽として作っている程度で少ないようです。

鉢植えは、庭木と異なり、見頃の樹を観賞しやすい身近に移動して観賞できます。長期間眺めるためには品種数を多くしておきます。

樹高は、一～二mから十～二〇cmと、小さくは二・五号鉢でも作れます。写真二のような二・五号鉢では、一㎡当たり二〇から三〇鉢置くことができます。

三、用土と鉢かえ

用土は、排水と保水性のよいものとします。適当なものがない場合は、鹿沼土、赤玉土、日向土などの混合したものを用います。

鉢かえは、根づまりの始まったものを三～四月か、六～七月上旬、または九月頃のいずれかで行ないます。

四、整姿、剪定と蕾の制限

樹冠が大きくなり過ぎたものや、好みの樹形からはみ出た枝は小枝を切って姿を整えます。針金などで枝作りをすることも考えます。

枝先に葉芽のないものはなるべく早く除去します。剪定が強くなると翌年の花が少なくなりやすいので、弱剪定とします。

蕾は、葉の数に対して多過ぎると樹勢が衰えますから早目に間引きをして毎年よい花を着けるように調節します。

五、鉢の置き場所と肥料

鉢が小さい場合や、若苗では、夏の高温で樹が衰弱しやすいので、半日陰地か、これに準じてカンレイシャで覆いをします。秋から春は日当たりがよいと花芽が着きやすくなります。

肥料は、大鉢ではN、P、Kがほぼ等量の化成肥料を十a当たり成分で三～四kgを春から秋までに三～四回施します。小鉢では液肥などを使って肥料不足にならないように回数と量をやや多く与えます。

六、品種を選ぶ

開花期別に考えると早咲きでは、野々市（淡紅一重小輪・九～四月咲）、西王母（淡桃地に紅のぼかし入り一重中輪・九月～三月）、高台寺（濃桃～桃一重小輪・十～三月）などがあります。香りのよい品種には、春風（淡桃一重・二～四

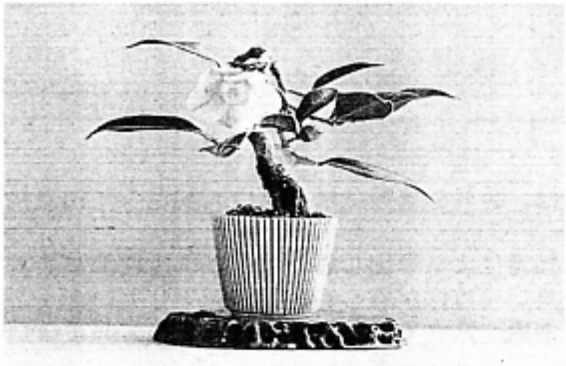

写真2　樹高 11cm，品種 姫佗助，開花期 1～2月

写真1　樹高 9cm，品種 白佗助，開花期 12～2月

写真3　樹高 10cm，品種 炉開，開花期 8（下）～4月

月）、港の春（桃一重極小輪・三～四月）など特徴のあるものが多く作出されています。佗助の仲間では、桂佗助（淡桃一重極小輪・一～四月）、胡蝶佗助（紅地に白斑入一重極小輪・一～四月）など美しいものです。カタログなどから自分好みの品種を選びましょう。

園芸総合センターの将来楽しみな樹木二種について

①イツベ（タベブーイア属）

ブラジルの国花である「イツベ」を昨年の三月に駐車場の横へ二〇本ほど定植しました。

この種子は、昭和五九年にブラジルから渡ってきたもので、翌年播種した苗が当センター開園の六二年四月に温室に入りました。

その後二年で室外に出され、平成七年に真黄色の小さい卵ぐらいの花を咲かせました。

我国での栽培については、どの本を見ても温室内で…となっていますが、露地でも大丈夫のようです。南米では樹高が十m余りになるとか、今後が楽しみです。

②紅しだれ桜

写真四は日本の桜の東の横綱といわれている福島県の「三春の滝桜」です。

写真五は、この滝桜（紅しだれ）の種子から育てた実生苗です。近くに住む柳沼ハナさんに無理にお願いして譲り受けた五本のうちの一本で樹高は約七mです。定植は当センターに隣接する高松空港の開港日（平成元年十二月十六日）、時に樹令五年、樹高二・三mです。樹令七〇〇年余りとされる親木にあやかり長く花を咲かせてほしいものです。

写真4　三春の滝桜　福島県三春町　（1996.4.26）
国指定天然記念物，樹高 19m余，根廻 10m余

写真5　上記滝桜の実生苗
（1996.4.9）